

三 条 法 人 会 長 賞



『自分たちにできること』

三条市立第一中学校 三年 五十嵐 悠人

「税金って、ちゃんと使われてるの？」ある日、友人のそんな一言

が印象に残った。たしかに税金は社会を支える仕組みだと教えられる。でも、どこか信用しきれない。払うのは国民の義務。けれど使い道は見えにくい。私はその矛盾をずっとモヤモヤと感じていた。小さい頃から税金に関する話は「難しいもの」としてさけてきた。けれど最近ニュースで政治家の税金の私的流用が報じられたり、高齢化社会で社会保障が厳しくなるという話を聞くたび、「私たちの未来と無関係じゃない」と思うようになった。たとえば道を舗装したり、災害時に避難所を設置したり、教科書を無償で配ったりするのは、すべて税金が使われている。そう聞くと、「ありがたいもの」のように感じる。けれど、その一方で、建設費が何倍にも膨らんだ公共施設や、選挙のたびに変わる無計画な政策にも、税金は、流れていく。税金は、「みんなのため」にあるはずなのに、「誰のため？」

と思う」とはある。私たち若い世代の声が反映される場は少くない。将来重い税負担を背負うのに、意見を言う機会すら与えられない。だからといって、興味を持たなければ、ますます声は届かなくなる。SNSでは、「税金を払っても何も変わらない」と諦めたような言葉をよく見かける。でも本当にそうだろうか。私たちが無関心でいれば税の使い道は今とままだ。けれど知らうとし、意見を持つことで少しずつでも社会を動かすことはできないか。最近では、若者向けの政策カフェや、税金の使い道を市民が投票で選ぶ「参加型予算」といった仕組みも始まっているらしい。大人の世界だと思っていた「税」も、少しずつ開かれつつある。だからこそ、私たちの側から近づく勇気が必要なかも知れない。

「税金」と聞くと、むずかしそう、面倒くさそうと思ってしまう。でも、それは自分の暮らしや未来に直結しているテーマだ。黙つても、無関心でも、税金は勝手に決められていく。だからこそ、黙らず、考える。少しずつでいいから、学び、話し、意見を持つ。それが、税をただの義務ではなく、「自分たちの社会を形作る道具」として使いこなす第一歩なんだと思う。社会は勝手に良くならない。でも、私たちが知ろうとする」とから、動き始める。中学校の内に所得税や、消費税、相続税、地方税などなどをたくさんくわしく知ることで大人になつたら、楽により良い社会を作つていけると思う。

